

## 弱視の高校生を対象にした高大連携プログラム —ICT活用スキルアップセミナーに焦点を当てて—

広島大学	氏	間	和	仁
慶應義塾大学	中	野	泰	志
宮城教育大学	永	井	伸	幸
帝京平成大学	田	中	良	広
広島大学	竹	林	地	毅
福岡教育大学	韓		星	民
愛知教育大学	相	羽	大	輔
神奈川大学	大	島	研	介

## 弱視の高校生を対象にした高大連携プログラム —ICT 活用スキルアップセミナーに焦点を当てて—

広島大学

氏 間 和 仁

慶應義塾大学

中 野 泰 志

宮城教育大学

永 井 伸 幸

帝京平成大学

田 中 良 広

広島大学

竹 林 地 毅

福岡教育大学

韓 星 民

愛知教育大学

相 羽 大 輔

神奈川大学

大 島 研 介

### 要約

視覚障害のある高校生を対象にした高大連携プログラムの開発と評価を行った。本稿ではその中のスキル調査と補助具・ICTスキルアップセミナーについて、プログラムの構成、スキル調査の内容を紹介した上で、スキル調査の結果とそれに応じたスキルアップセミナーの効果を事前事後アンケートおよび事後レポートの内容より評価した。高校3年生の4名の参加者の結果から、スキル調査により設定したスキルアップセミナーにより補助具とICTの活用技術の向上がみられ、さらに進学時の不安が低下していた。これらのことから、スキル調査に基づいたスキルアップセミナーによりスキルの向上が見られ、本プログラムに参加したことにより進学時の不安も低下することが明らかになった。今後は、本プログラムおよび評価方法を改善し、視覚特別支援学校で実施できるよう最適化していきたい。

キーワード：高大連携，視覚障害，高校生，合理的配慮，ICT

### 1. はじめに

障害者差別解消法が施行され、大学・短期大学、および高等専門学校の高等教育機関(以下、大学等)への視覚障害のある進学者の数は510人(障害のある全学生数5,444人)(平

成17年度)(日本学生支援機構,2006)から、831人(31,204人)(平成29年)(日本学生支援機構,2018)へと増加しており、大学等でも一定の取り組みが求められている。今後、全ての大学等において、障害のある学

生に対する合理的配慮の提供が求められることを踏まえた検討を行うため、文部科学省は「障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）」（文部科学省，2012）（以下，第一次まとめ）において、「合理的配慮の決定過程においては、・・・学生本人の要望に基づいた調整を行うことが重要である。大学等は、学生本人の教育的ニーズと意思を可能な限り尊重しつつ、・・・。」と指摘した。

続く、「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第二次まとめ）」（文部科学省，2017）（以下，第二次まとめ）の「6. 各大学等が取り組むべき主要課題とその内容」 「(2) 初等中等教育段階から大学等への移行（進学）」においては、

- 1 引き継ぎ（個別の教育支援計画等の支援情報の活用）
- 2 学生の意向の最大限の尊重
- 3 支援に関する情報発信（相談窓口等設置，機会の設定）
- 4 モデルケースの積極的発信
- 5 入学後の支援内容の継続的検討

の5項目について指摘している。これらの大学への移行，すなわち高大連携の重要事項5項目を，分類すると、「情報提供」，「引き継ぎ」，「継続した検討」の3つに集約できる。つまり，大学が実践している支援の内容や，支援の実績についての「情報提供」，支援情報の高等学校（高等部）からの「引き継ぎ」，学生の意向を最大限に尊重した，入学後の支援の「継続的な検討」である。

学生が大学に入学して活躍するためには、「第一次まとめ」が指摘した「学生本人の要望に基づいた調整を行うこと」に根ざし、「第二次まとめ」が示した「情報提供」や、「引き継ぎ」，「継続した検討」といった高大連携の充実が求められよう。

そこで，我々は，視覚障害のある高校生が適正に要望を出すことをねらいとして，大学のことや自身の補助具やICT活用スキル，入試や配慮要求の仕組みを十分に知る機会の

設定と，併せて自身の補助具・ICT活用スキルや建設的対話スキルの向上の機会から成る高大連携プログラムの開発と実施，評価を目的とした研究を開始した。

本研究の最終的な目的は，視覚障害のある高校生のための高大連携プログラムを開発・実施・評価し，視覚障害特別支援学校のセンター的機能等で活用可能な形式に最適化し，全国で必要とする視覚障害のある高校生に本プログラムを実施し，地域の高校生が地域の力で夢を実現していく社会を形成することである。その過程として，本稿では，立案したプログラムの中から特に補助具・ICTスキルの調査とセミナーの部分について報告する。

## 2. 方法

### (1) プログラムの立案

高大連携プログラムで実施するセミナーを「スキルアップセミナー」（以下，SUS）と命名し，2018年度に実施したセミナーをSUS2018と命名した。本プログラムは，本研究に参加している視覚障害教育を専門とする大学教員6名がコアメンバーとなり，会議やフィールドワーク等を実施しながら，各地域の現状や「第一次まとめ」，「第二次まとめ」等に基づいてプログラムの立案を行った。以下，その概要を示した。

SUS2018の柱は，「第一次まとめ」が指摘した通り，大学進学に際して「要望」するためには，「知る」ことが前提となることを踏まえ，特に視覚障害の生徒の特性を考慮して，体験的に「知る」ことと，それを生かすための技術を「身につける」こととした。知ったことにより生じた課題を解決するための手立てを身につけることで，より自信を持って大学に挑戦することができると考えた。

「知る」プログラムは，「第一次まとめ」の求めを達成するために，高校生が配慮要求するに足る知識を得ることを目的として可能な限り体験的内容で構成した。配慮要求するためには，要求先に関する状況と自身の状況の両方を勘案する必要があるため，それらを盛

り込んだ。具体的には、入試、大学および自分自身のことを知る内容で構成された。実際には、大学の図書館、学食、大教室、掲示板、大学の広さなどの施設、時間割、学生便覧、試験などの各種資料などを体験することとした。自分自身を知る内容では、大学で実際に要求されるタスク（メールを受信して回答する等）が課せられ、現有の補助具やICT機器を活用して解決する中で自身の現在の到達点を知る活動を行なった。体験を通して知ること、大学の要求と自分の到達点とを勘案して、今行うべきことが明確となり、入試や入学への準備や、入試時・入学時の配慮要求がより具体的に進められるようになることをねらいとした。

「身につける」プログラムは、「第二次まとめ」に示された、本人が自身の意向を適切に示したり、入学後も継続して配慮を継続できるよう要求したりできるようになるための知識と技能を身につける内容で構成した。知識としては、合理的配慮の理念、センター試験や配慮要求の仕組みについて取り扱い、技能としては合意形成のための建設的対話スキルを身につける内容を設定した。併せて、今後、課題解決に求められる、補助具およびICT活用スキルを身につける内容を盛り込んだ。なお、補助具・ICT活用スキルを身につけるセミナー（以下、補助具・ICTスキルアップセミナー）で取り扱う内容は、前日に実施したスキル調査の結果を踏まえて構成された。

## (2) 手続き

SUS2018の開催期日は、2018年8月11～13日、慶應義塾大学の教育・研究施設と宿泊施設を利用して、2泊3日で行われた。参加者は、盲学校長会の協力を得て、全国の視覚特別支援学校を通じて行われた募集に対して応募した弱視生4名（高校3年）、全盲生2名（高校1・2年）であった。指導者は6名のコアメンバーを中心に、大学入試センター教員、視覚障害者用支援機器販売会社社長、ファシリテーション専門の大学教員、触覚・コンピュータに詳しい大学教員、眼科ス

タッフ、視覚補助具販売会社社員であった。

補助具・ICTスキルアップセミナーは事前・事後の自己評価アンケート（21項目）、セミナー評価アンケート（8項目）およびセミナー後に行った事後レポートの記述により評価した。各評価項目は「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の5件法であった。これらのアンケート結果および事後レポートの記録を研究目的で利用することは、事前に本人・保護者の了承を得た。本研究は広島大学大学院教育学研究科及び慶應義塾研究倫理委員会の承認を得て実施した。

## 3. 補助具・ICTスキル調査およびセミナーの結果と考察

### (1) 補助具・ICTスキル調査の内容

本稿では、8月11日に実施した補助具・ICTスキル調査、および8月12日に実施した補助具・ICTスキルアップセミナーを中心に報告する。

スキル調査の内容を表1に示した。スキル調査は、課題1から課題5で構成された。含んだスキルは、大学での基本となるスキルを想定して、メールの送受信、webページからの読み取り、PDFの操作、webフォームの操作であった。スライドの作成や図表の作成等の専門的な内容は今回は対象としなかった。課題1から課題5で想定したスキルを、入力・処理・出力に分けてその詳細を表1に示した。スキル調査は2時間かけて実施した。

### (2) 補助具・ICTスキル調査の内容

課題1について説明する。「入力」では、図1が紙（墨字）及びPDFで配布された（図1内の語句「学会」は「学科」の入力ミスで、当日配布時に口頭で訂正した）。参加者は紙とPDFのメディアから課題を読み取るスキルが求められた。授業中、紙（墨字）とPDFで配布されることは最近珍しくなくなったためである。「処理」では、課題に沿って、志望大学・学部・学科の3ポリシーをwebページで検索して、ワープロソフトに

表 1 補助員・ICT スキル調査の内容

	入力	処理	出力
課題 1	紙 PDF形式	Webページを調べる	PDF作成 Webフォーム提出
課題 2	DM添付ファイル パスワード 回答ファイルを開く	Webページを調べる 回答ファイルに回答	PDF作成 Webフォーム提出
課題 3	壁面の掲示 QRコード読み取り	食べたい食事決定	Webフォーム回答
課題 4	DM添付ファイル パスワード	アクセシブルPDFへの アクセス 自由時間の過ごし方 を考える	メール本文に回答
課題 5	ML添付ファイル パスワード	画像PDFへアクセス ワード表に入力	PDF作成 メールに添付 メールの送信

まとめることが要求された。その際、1行目、2行目、3行目に、記載すべき項目が指定され、指定された様式で作成するスキルが求められた。ワープロソフトの指定はなかった。大学においても、ワープロソフトを指定することはないためである。「出力」では、ワープロソフトでまとめた内容をPDFで出力するスキルと、指定されたURL（文字列及びQRコード）から投稿用webフォームを開くこと、webフォームに入力し投稿するスキルが求められた。

課題2について説明する。入力では、ダイレクトメールを受信するスキル、添付ファイルを、パスワードを用いて開くスキルが求められた。処理では、webページで調べるスキル、word形式の回答ファイルに記入するスキルが求められた。出力では、PDF形式で保存するスキル、webフォームから回答するスキルが求められた。

課題3について説明する。入力では壁面の掲示板の内容を読み取るスキル、掲示のQRコードを読み取るスキル、処理では、当該レストランのホームページを検索して、食べたいメニューを選択するスキル、出力では、webフォームに直接回答するスキルが求められた。

課題4について説明する。入力ではダイレクトメールを受信するスキル、添付ファイルを、パスワードを用いて開くスキルが求められた。処理ではアクセシブルPDFへアクセスするスキル、自由時間の過ごし方を考え

ることが求められた。出力では、回答をメールに決められた書式で記入するスキル、メールを送信するスキルが求められた。

課題5について説明する。入力では、メーリングリスト宛のメールを受信するスキル、添付ファイルを、パスワードを用いて開くスキルが求められた。処理では画像PDFへアクセスするスキル、PDFに回答するスキル、Microsoft Word（以下、Wordと記す）の表に入力するスキルが求められた。処理では、Wordの表に記入するスキルが求められた。出力では、PDFで保存するスキル、ルールに従ってファイル名を付けるスキル、メールに添付するスキル、メールを送信するスキルが求められた。

### (3) 補助員・ICTスキル調査の結果

スキル調査の結果を表2に掲載した。参加者B、Cは課題5まで終了し、Aは課題5の途中まで、Dは課題4まで終了した。Eは課題1の途中までと、課題2の途中まで、Fは課題1の途中まで終了することができた。

参加者Aは、iPhone、iPad Pro 12.9inch、iPad 9.7inchを利用して取り組んだ。紙の資料はiPhoneのカメラで閲覧していた。初期段階で、データで見たいとの配慮要求を行うことができ、データでの閲覧を行なった。iPadの操作について、AirDropでファイルを転送しUDブラウザ等で開く、スプリットビューで2画面表示する、Safariのリーダー機能を利用して文字部分のみを読みやすい表示にする、Wordの操作、長文の範囲選択と

課題1 志望大学・学会の特徴を3つのポリシーで整理しよう。

志望する大学の学部の3つのポリシーを調べて、整理して、web ページから投稿してください。大学の3つのポリシーから大学や学科の特徴をつかみましょう。

大学の学部や学科等には3つのポリシーがあります。3つのポリシーとは、アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）、デュプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）のことです。この3つのポリシーを整理して比較することで、学科選択の際の材料を得ることができます。

上記のレポートをPDFにしてweb フォームから提出しよう。

レポートの1行目には、テーマ「私が進学したい大学・学部の3つのポリシー」と書いてください。

レポートの2行目には、自分の在籍学校名、学年、氏名を1マス空けて書いてください。

レポートの3行目から、調べたことをまとめてください。

課題の提出は、以下のフォームより行なってください。

<https://ws.formzu.net/fgen/S63246972/>



図1 課題1の内容

コピーなどを行うことができていた。課題5の途中までで調査時間を終了したのは、時間が足りなかったことが原因であった。補助具・ICTスキルアップセミナーではパソコンの利用方法、パソコンとiPad等の連携方法を中心に取り扱うこととした。

参加者Bは、iPadを利用していた。スクリーンキーボードのタイピング速度が速く、スプリットビューを状況に応じて利用できていた。課題3でURLを撮影した写真を見ながら、Safariのアドレスバーに入力するためにスプリットビューを利用したり、フォームに入力する内容をスマートフォンからiPadにLINEを利用して送信するなど、メールを書く際はスマートフォン、PDFに記入する際はiPadと、状況に応じた機能や機種選択が行えていた。その他、WordをiPadで利用したり、Webで検索できたり、コピー&ペーストでWordに貼り付けたりなどの操作が行えていた。iPadを固定するアームや各種アクセシビリティ機能、Wordの基本的な使い方について補助具・ICTスキルアップセミナーで取り扱うこととした。

参加者Cは、基本的なスキルが身につけており、スクリーンキーボードの入力も速い。

課題2の2で、メモで書いた内容をWordにコピー&ペーストすることを助言する以外は、自力でできていた。パソコンの使い方、パソコンとiPadとの連携、使い分けをスキルアップセミナーで取り扱うこととした。

参加者Dは、時間が足らず課題4で終了した。操作能力はそれなりに身につけているが、PDFの作成、操作についてはこれからの状態であった。課題の読解に困難を示す場面がみられた。iPadの基本操作からPDFの操作、他のアプリとの連携について補助具・ICTスキルアップセミナーで取り扱うこととなった。

参加者Eは、音声ユーザーであった。iPhoneやiPadをVoiceOverで利用する技能はある程度身につけていたが、課題1を完遂する程ではなかった。また、パソコンの操作、タッチタイピングも未修得であった。さらに、パソコンの状態が十分でなく、その環境設定に時間を要したことが課題が進まなかった原因として大きい。補助具・ICTスキルアップセミナーでは、タッチタイピングの練習方法の習得、パソコンの基本操作を取り扱うこととなった。

参加者Fは、音声ユーザーであった。パ

ソコン, iPhone, iPad を持参していた。課題遂行においてどの機器を利用したら良いかといった質問があった。タッチタイピングが未修得で、課題1の途中まで遂行することができた。補助具・ICTスキルアップセミナーでは、パソコンの基本操作、タッチタイピングを中心に扱うこととなった。

#### 4. アンケート調査の結果と考察

ICTスキルアップセミナーの実施内容と、事前・事後のアンケート調査結果、事後レポートの内容をまとめる。ここでは、アンケート調査結果の中から、ICTスキルに関する項目である、

- 質問 8 メールに添付してあるファイルに、テキストを入力することができる。
- 質問 9 ファイルをメールに添付して、指定されたアドレスに送信することができる。
- 質問 10 紙の印刷物をデータ化して、自分で読むことができる。
- 質問 11 PDFなどのデータに、アクセスすることができる。
- 質問 12 ホームページのフォームに氏名などを入力して、ファイルを投稿することができる。

これらの5項目について、アンケートおよび事後レポートの提出のあった、参加者AからDについて報告する。

##### (1) 参加者Aの結果

補助具・ICTスキルアップセミナーでは、パソコンの利用方法、パソコンとiPad等の連携方法を中心に、スキル調査の課題への対処法を指導した。事前事後アンケートの結果を表3に掲載した。「質問12 ホームページのフォームに氏名などを入力して、ファイルを投稿することができる。」で1ポイントの上昇が見られた。事前アンケートで質問8から質問11までは評価5であったため、全項目で評価5になったことになる。本人の記述には『今回習得したICT技術によって、

以前に比べ同じ課題にしても、スムーズにこなせるようになった。iPad 2台, MacBook, iPhoneの組み合わせを工夫すればもっと便利に、簡単に使えることも知った。自分がまだ知らないことは沢山ある、ということを知れたこと(習得した知識の一つ)によって、今現在持っているスキルの中でやりくりすることなく、つまりその場にとどまることなく、更なるスキルアップが可能となる。また習得したスキルを人に伝えることもできるようになると感じた。』とあった。

もともとICTスキルの自己評価が高かった参加者Aであったが、事前アンケートで評価4であった項目が1ポイント上昇し、さらに自由記述では「課題がスムーズにこなせるようになったこと」、「タブレット、パソコン、スマートフォンを組み合わせる利用することの価値」に関する内容があった。スキル調査による結果により自己を知り、スキルアップセミナーでニーズに応じた技能の習得が進んだことが伺える。

##### (2) 参加者Bの結果

補助具・ICTスキルアップセミナーでは、iPadを固定するアームや各種アクセシビリティ機能、Wordの基本的な使い方について取り扱った。事前事後アンケートの結果を表4に掲載した。「質問12」で1ポイント上昇し、「質問10 紙の印刷物をデータ化して、自分で読むことができる。」で1ポイント低下していた(表4)。自由記述には『iPadを多少使えると思ってセミナーに参加したが、PDF化した画像の処理方法や、知らなかったアプリの発見、iPad内にある音声機能、拡大鏡などがあり、とても勉強になった。大学だけでなく受験勉強など今からでもできることが多いのでぜひ実践して行きた。また、大学でもらう資料やメールなどをデジタル化する事でどれだけ楽に見ることが出来るのかについてセミナーを通し知ることが出来た。』とあった。参加者Bは参加者A同様、事前アンケートでは設問12を除いて評価5であった。したがって、事前と事後を比較する

表2 補助具・ICTスキル調査の結果

		A	B	C	D	E	F
		弱	弱	弱	弱	盲	盲
課題1	大学・学部の調査スキルを身につける。	1	1	1	2	2	1
	ワープロソフトを利用して、PDFで出力できる。	1	1	2	2	3	2
	指定のホームページを開くことができる。	2	1	1	1		
	フォームから入力し投稿できる。	1	1	1	2		
-----							
課題2	学生支援についての情報収集スキルを身につける。	1	2	1	2	2	
	メールを受信して、パスワードを入力して開く。	1	1	1	1	1	
	指定された項目に従ってワープロに打ち込む。	1		1	1	1	
	フォームから投稿できる。	1		1	2		
-----							
課題3	壁に貼られた紙へのアクセス方法を身につける。(質問可)	1	1	1	1		
	指定されたフォームから送信できる。	1	1	1	2		
-----							
課題4	メールでファイルを受信し、パスワードを入力して開く。	1	1	1	1		
	アクセシブルPDFにアクセスし、情報を得ることができる。	1	1	1	1		
	指定されたメールアドレスに送信できる。	1	1	1	2		
	指定された件名や内容を記載してメールを送信できる。	1	1	1	1		
-----							
課題5	メールでファイルを受信して開く。	1	1	1			
	指定されたURLを開き、ファイルをダウンロードする。	1	1	1			
	指定されたファイルにパスワードを入力して開く。	1	1	1			
	画像PDFにアクセスして、情報を得る。	1	1	1			
	ワードの表に入力する。	1	1	2			
	ワードファイルを受信してPDFで出力する。		1	1			
	ファイルを添付してメールを送信する。		1	1			
評価基準：		1：助言なしで実施可能					
		2：助言ありで実施可能					
		3：助言ありで実施不可能					

表3 参加者Aのアンケート結果

	質問 8	質問 9	質問 10	質問 11	質問 12
事前	5	5	5	5	4
事後	5	5	5	5	5
変化	0	0	0	0	1

表4 参加者Bのアンケート結果

	質問 8	質問 9	質問 10	質問 11	質問 12
事前	5	5	5	5	4
事後	5	5	4	5	5
変化	0	0	-1	0	1

と、1項目の上昇であった。一方、自由記述では「PDFの処理の方法」、「アプリの発見」、「音声機能」など様々な技能の定着が記されていた。スキル調査の結果、アームやアクセシビリティ機能を中心に指導することを計画し、その成果を伺うことができた。

### (3) 参加者Cの結果

パソコンの使い方、パソコンとiPadとの連携、使い分けを補助具・ICTスキルアップセミナーで取り扱った。事前事後アンケートの結果を表5に掲載した。「質問8 メールに添付してあるファイルに、テキストを入力することができる。」「質問9 ファイルをメールに添付して、指定されたアドレスに送信することができる。」「質問11 PDFなどのデータに、アクセスすることができる。」では1ポイント上昇し、「質問12 ホームページのフォームに氏名などを入力して、ファイルを投稿することができる。」では2ポイント上昇した。自由記述には『テキストやプリントをデータ化すること、データの処理を学んだことで、より負担のない状態で勉学に励むことができる。今までは他の人に頼

んでいた部分が自分で出来るようになるので、他の人の手間を増やしてしまったり、罪悪感にかられることが少なくなると思う。ソフトだけではなく、ハードウェアを適切に選択することによって、より効率的で洗練されたICTの活用が出来るようになった。色々な機能を知ったので、大学や就職後、見ることが難しい場面で、良い解決方法を相手に提示できるようになった。』といった記載があった。「ハードウェアの適切な選択」、「印刷物のデータ化」などの記載から、スキル調査に基づき、パソコンの操作とタブレットとの連携についてスキルアップセミナーで指導した効果が伺えた。また、それらのスキルの獲得により、『罪悪感が少なくなる』、『良い方法を相手に提示できる』など自己肯定感の向上をうかがわせる記載も見られた。

### (4) 参加者Dの結果

iPadの基本操作からPDFの操作、他のアプリとの連携について補助具・ICTスキルアップセミナーで取り扱った。事前事後アンケートの結果を表6に掲載した。「質問8 メールに添付してあるファイルに、テキスト

表5 参加者Cのアンケート結果

	質問 8	質問 9	質問 10	質問 11	質問 12
事前	4	4	4	4	3
事後	5	5	4	5	5
変化	1	1	0	1	2

表6 参加者Dのアンケート結果

	質問 8	質問 9	質問 10	質問 11	質問 12
事前	4	4	4	3	4
事後	5	4	5	5	5
変化	1	0	1	2	1

を入力することができる。],「質問 10 紙の印刷物をデータ化して、自分で読むことができる。],「質問 12 ホームページのフォームに氏名などを入力して、ファイルを投稿することができる。」で1ポイントの上昇,「質問 11 PDFなどのデータに、アクセスすることができる。」で2ポイントの上昇がみられた。自由記述では『この ICT スキルアップセミナーでは、センター試験を受ける上での拡大読書器やルーペなどの今まで使ってきた補助具の応用的な使い方を覚えました。次に、PDF データやテキストデータの扱い方、ファイルの管理、文書の形式の変換の仕方、メールでのやり取りなど、普段あまり触れて来なかったような内容にも取り組んでスキルを身に付けることができました。大学入学後のことを想定して文字の小さい教科書などの紙媒体の資料をどのようにデータ化するか、それをそのように iPad に入れるか、などの柔軟な対応の重要性を学ぶことができました。』といった内容がみられた。アンケート結果では質問 9 以外でスキルの向上がみられたこと、自由記述から「PDF やテキスト

データの操作],「紙資料の扱い」などスキル調査に基づいて設定したスキルが獲得できたことがうかがえる。さらに、視覚補助具の応用的な利用法の獲得に関する記述もみられた。

#### (5) その他の項目の結果

事前・事後アンケートのその他の項目で4名中3名が上昇していた項目は、「質問 16 大学の構造について理解している。],「質問 17 大学入学後どのような資料へのアクセスが必要となるか理解している」といった、大学を知る活動に関する事項,「質問 18 大学に配慮要求するために必要な知識を身につけている」,「質問 19 大学に配慮要求するために必要なスキルを持っている」,「質問 20 大学とよい WIN-WIN な関係をつくりながら配慮要求ができる」といった、合意形成に関する事項であった。

事後レポートの記録から『合理的な配慮では言い方や相手のことを考えた上で自分の要求を相手の学校に伝えていきたいです。お互いが分かり合えることのできる WIN-WIN の関係を上手く作っていきたいです。],『ICT スキルの確認で初日より技術の向上を実感出

来、3日間で学べたことを改めて理解出来たと思う。』等のポジティブな意見がみられ、合意形成に関する知識と建設的対話のスキルを取り扱ったことが参加者にとって印象が大きかったようだ。

大学進学に向けての不安については、「質問 15 大学の選択に関して不安がある」、「質問 21 大学へ進学してからのことについて不安がある」は、3名の回答で低下しており、本スキルアップセミナーが受験者の大学受験・進学に対する不安を解消したことがうかがえた。今回の「知る」と「身につけること」をテーマにしたプログラム全体の不安の低減にまで及んでいることが推測できる。

## 5. まとめ

スキル調査とそれに基づいた補助具・ICTスキルアップセミナー、アンケート及び事後レポートより、本セミナーに参加することで、大学での修学で利用するICTスキルを知り、それが身についたと考えられる。進学を目指す視覚障害のある高校生への教育相談等においては、少なくとも大学や自身を知ること、入試・補助具やICTスキルの知識・技能を、大学で求められるスキルに基づいて伝えること、つまり competency<sup>\*1</sup>を基盤とした課題設定が大切であることが示唆された。

併せて、建設的対話スキルの向上や、大学の選択や入学の不安は低下していたことから、ICT等の活用スキルを competency basedで教えることと合わせて、合意形成の知識と方法を伝えることが大切で、それにより大学選択や入学の不安も低減される効果を期待できそうである。

日本学生支援機構(2018)や文部科学省の調査から推計すると、平成29年度に大学に在籍していた視覚障害学生831人(盲が176人、弱視が655人)の内、視覚支援学校の卒業生は153名である。今後、通常の

高等学校から大学に進学している8割を超える学生の介入に資することが出来るように、本セミナーのプログラムをさらに充実させ、日本の全ての視覚特別支援学校で実施できるような体制を構築したいと考えている。

## 謝辞

告知および募集に協力いただいた全国盲学校長会および全国の視覚特別支援学校のみなさまに感謝の意を表す。

本研究は、JSPS 科研費基盤研究(A)「通常の学級で学ぶ視覚障害児のための合理的配慮に関する支援システムの構築」(16H02072)、基盤研究(B)「視覚障害者の円滑な大学進学を目指した高大連携システムの開発と評価」(18H01040)の助成を受けた。

## 文献

- 日本学生支援機構(2006) 大学・短期大学・高等専門学校における障害学生の修学支援に関する実態調査報告書. 日本学生支援機構.
- 日本学生支援機構(2018)平成29年度(2017年度) 大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書. 日本学生支援機構.
- 文部科学省(2012) 障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)(平成24年12月25日), [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/12/1329295.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/12/1329295.htm) (2019年1月4日).
- 文部科学省(2017) 障害のある学生の修学支援に関する検討会報告(第二次まとめ)(平成29年03月29日), [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/074/gaiyou/1384405.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/074/gaiyou/1384405.htm) (2019年1月4日).

<sup>\*1</sup> 単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/031/toushin/attach/1397267.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/031/toushin/attach/1397267.htm) 文部科学省HPより)